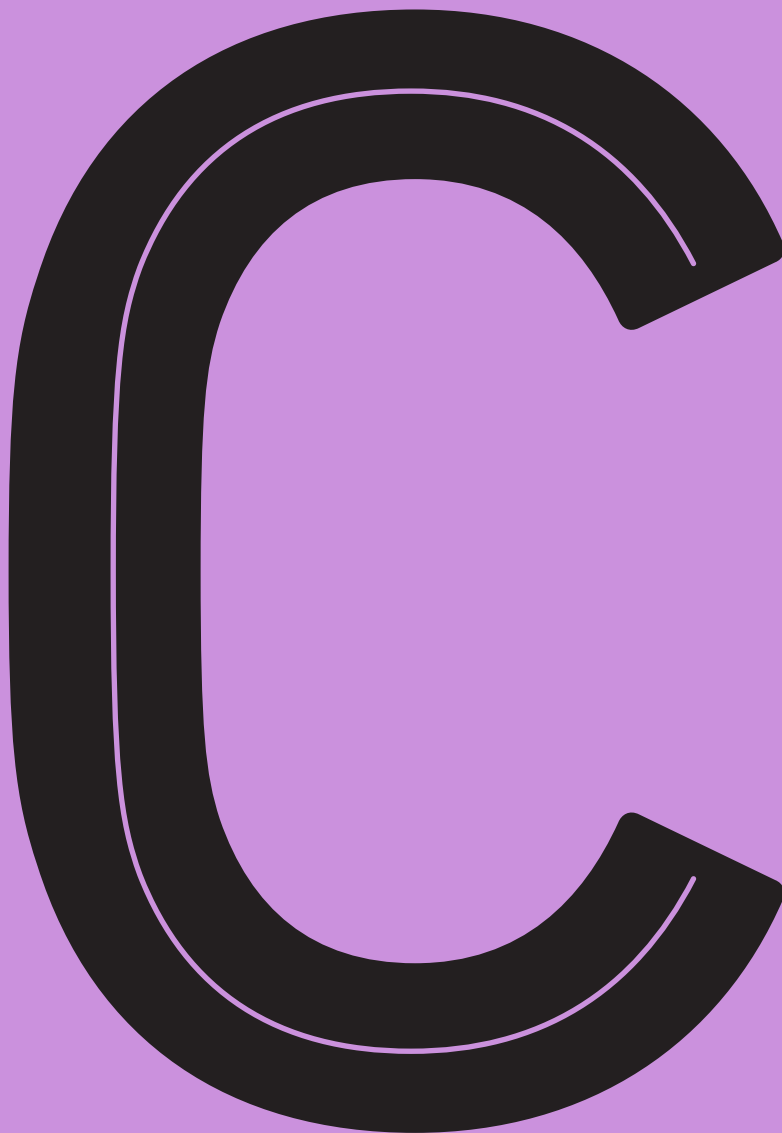




paper



no.006



濱口竜介 × 塚原悠也
(映画監督) (contact Gonzo)



武田重昭・曾我部昌史
(ランドスケープ (みかんぐみ) プランナー)



みんなのうえん
コーポ北加賀屋



makomo
(イラストレーター)



濱口竜介 × 塚原悠也

(映画監督)

(contact Gonzo)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。6回目となる今回は、東日本大震災後、東北へ移り住み、被災者への聞き取りを作品化した映画監督・濱口竜介氏、身体の接触によってパフォーマンスを引き出すcontact Gonzoの塚原悠也氏を招き、それぞれが考える「即興性とドキュメンタリー」についてお話いただいた。

間違い続けるために

塚原：僕は、学生時代からずっと、コンテンポラリーダンスやパフォーマンスのためのスペースで働いてきました。そこで多くの公演を見ているうちに、意図された展開にあまり驚かなくなりました。逆に、舞台上で倒れたらいけないものが倒れたりするなどのアクシデントのほうがドキドキする。なので、展開の言語的な組み立てから脱するため「間違い続ける」ことを常態化できないかと考えたんです。

濱口：最初にcontact Gonzoを見たときは驚きました。一見、単なる殴り合いのように見えますが、恐ろしく冷静にそれぞれがそれぞれの身体を感じ、距離を保っている。

塚原：いわゆる「ダンス」とは異なる身体がそこにはあって、ダンサーとしての姿勢や目線、表情のコントロールができない素人なんだけど、だからこそ、その人たちが舞台上上がることで、エラーが起こり続ける。つまり、振り付けられた動きではないので、どうしても即興的な動きが求められる。それを「ダンス」の文脈に乗せているんです。

濱口：先日、山口情報芸術センター(YCAM)の映像を見せていただいたのですが、山の斜面を滑り落ちるとか、森の中で家をつくる、動物の動きを撮影するといった、身体がぶつかり合いからもひとつ飛び越えている感じがしました。そのあたりの関係性って、どのように考えているのでしょうか？

塚原：僕たちのパフォーマンスは、基本的にすべて物理現象としてとらえようとしているんです。つまり、単に押された、殴られたというよりも「速くて面積の小さな物体との接触」として、それがおもしろいか、おもしろくないかで判断したい。濱口さんがご覧になった映像は、山口の山中に2週間移り住むというプロジェクトの過程を映しているものです。住むための小屋をつくりながら、森の中にトレイルカメラを仕掛けて、動物と人間の動きを録画・

観察するのも、山を滑り降りるのも、間違いを起こし続けるための物理的現象を理解する上でつながっているんですね。ベクトルや摩擦、加速度を基準にすべての動きを考えていくと、その中で人間も動物も等しく理解することができる。

濱口：話を聞いているとブラジルのサッカーと近いような気がします。服をまるめたようなサッカーボールを使って、フィールドは自分たちで定める。そこでは、サッカーをすることが貧困から抜け出るきっかけになっていて。contact Gonzoとの共通としては、システムから抜け出すための即興性と、誰でもやろうと思えばできるという遊戯性の部分が双方重要なのかなと思いました。

ダンスは“映らない”のか

濱口：東日本大震災後、仙台へ移り住んで、被災者への聞き取りを行い、「なみのおと」「なみのこえ 気仙沼」「なみのこえ 新地町」という3本の作品にまとめました。撮影中に考えたのは、ある場を映像記録することは未来に対する責任を伴うということです。2時間の映像作品は「未来の2時間」を食いつぶす、もしくは食いつぶし続けますから。そこには何かが映っていないといけない。

塚原：自覚が必要ですね。僕自身「ダンス」が“映る”のかという問題に対して常に考えていて、“映らない”と思っているんです。

濱口：その「ダンスが映らない」ってどういう感覚なのでしょう？

塚原：contact Gonzoでのパフォーマンスも撮影していますが、あくまで映像は映像。ただ、それはさきほどの「間違い」の話にもつながっていて、フレームから外れていても撮り続けるとか、編集しないとか、そういうところにこだわろうと思っています。

濱口：僕も基本的には“映らない”と考えていますが、パフォーマンスという物理現象は、映像でとらえられているはずなんです。ただ例えば、被写体の雰囲気が一瞬で変わって、真面目になった



なという線引きを、単なる記録映像で伝えることは難しい。

塚原：おっしゃるように、それは視覚以外の要素が大きいですね。その場のピリッとした空気は現場でしか感じ得ない。ほかに“映らない”要素があるとすれば、観ている人それぞれの心境かな。

濱口：日本の有名な舞踏家・大野一雄さんととらえた映像を観て思ったのは、被写体とカメラマンの2人の間柄が見えてくるほど、カメラとの関係性が重要だということです。パフォーマンスを映像がとらえるためには、固有のカメラポジションを見つけないといけない。その逆も考えられて、純粋にカメラで撮られるためのパフォーマンスが必要なかもしれないも思ったりします。

塚原：濱口さんが監督されたドキュメンタリー『なみのこえ』では、特殊なカメラワークを採用していますよね。

濱口：そうですね。記録映像では本来、撮れるはずのない真正面からのカットを織り交ぜています。そこでは出演者がカメラに向かって、まるで互いに向かい合っているかのように話している。演じているわけですね。さきほども話したように「未来の2時間」を食いつぶすというより、意義ある2時間であるためには、それが多層的な2時間である必要がある。それをくり出すためにすぐくフィクショナルなカメラワークを採用していますね。

真顔でいたずらするということ

濱口：今まで話してきた即興的なものって、既存の仕組みや方法から脱却するための方法でもあるわけです。だから、映画において即興的な演技を取り込むというのは、映画としての円滑な物語りを損なう行為でもある。即興によって演技がリアルじみても、感情が激しくなりすぎてダメで。僕としてはただただ、ごく率直な反応によって映画が構成されるように即興を採用したいと思っています。

塚原：それは僕たちの活動にも言えますね。そもそも「Gonzo」とは、ハンター・トンプソンの「ゴンゾー・ジャーナリズム」という運動が由来です。客観性が必要となるジャーナリストでありながら、自分自身も取材対象とするようなめちめちめちめ文章の作りかたをしていることから、ならず者(=Gonzo)だど。そのスタンスは、ある種のリテラシーを攻撃する方法になっている。

濱口：そういった既存の仕組みから逸脱することを排除する流れが、現代社会においてもあると思うんです。9月から神戸のKIITOで「即興演技ワークショップ」を行うのですが、それはある意味、目に見えないルールや何かへの配慮によってこぼれている身体から、偶発的で、率直な反応を誘い出す取り組みでもあります。

塚原：僕たちもダンスのハイリテラシーとされているものと同じ土俵に並んで、素人が横やりを入れる、いたずらする、みたいなことがやりたかったんです。だから、ほんまは知らんけど自分たちのパフォーマンスを「ダンスです」「芸術です」と真顔で偉そうに語る。

濱口：真剣に遊ぶわけですよ。

塚原：そう、誰よりも真面目に考える。ただ、エクストリームな方法を用いるわけではなく、例えば、どこにでもある段ボールを使って山サーフィンをするように、実は誰にでもできるような方法をできるだけ選択しています。何かに対するカウンターとしてそれが一番いい。僕の役割は、そうやって活動していく中で生まれる慣れやスタイルをどんどん壊していくことだと思っています。

濱口竜介
Ryusuke Hamaguchi

1978年生まれ。神奈川県出身。東京藝術大学大学院映像研究科に入学。2008年、修了制作の「PASSION」が国内外の映画祭で高い評価を得る。その後東日本大震災の被災者へのインタビューからなる映画「なみのおと」(2011年、共同監督：酒井耕)を制作。

塚原悠也
Yuya Tsukahara

1979年生まれ。2006年、垣尾優と共に「contact Gonzo」を大阪にて結成し、5人で活動。公園や街中で、「痛みを哲学、接触の技法」を講う、即興的な身体の接触を開始。互いの行為を写真や映像に収め、映像は動画サイト「YouTube」で即時配信される。

リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方



3つ目のバトン

武田 重昭

Shigeaki Takeda



1975年神戸市生まれ。UR都市機構で実務に携わった後、兵庫県立人と自然の博物館研究員を経て、2013年4月より大阪府立大学緑地計画学研究室助教。同世代のネットワークによる「いま、都市をつくる仕事」(学芸出版)の研究会やまちづくりの蓄積をつなぐ「1960年代の都市計画再考」(都市計画学会誌)、「恩師からのバトン」(造園学会誌)などを企画。

> 武田さんが選ぶ次のコラムニストは…岡昇平氏(建築家)温泉も旅館もまち全体も、岡さんに会うと居心地がいいってどういうことなのかを実感できます。(武田)

あるものを生かす

曾我部 昌史

Masashi Sogabe



福岡で生まれ愛知と東京で育つ。ふとしたきっかけから、幼少期より建築系を目指す。小学校の卒業文集に書いた「大人になったら設計技師になって超高層を設計する」という夢は実現してないが、去年、塔はつくれた(茅葺き)。神奈川大学の教員として、また、みかんぐみの共同主宰者として、日々、建築のデザインなどを行う。

> 曾我部さんが選ぶ次のコラムニストは…山田創平氏(社会学者)都市の現状を見ながら、歴史的背景を想像しつつ語る、その語り口が素敵です。(曾我部)

ちょうど大学の研究室に戻る事が決まった頃、西田さんからこのリレーコラムのバトンをいただいた。これまでにどんな方々がバトンをつないで来たのかが気になって、バックナンバーを読み返してみた。山崎亮さんからはじまって、小野田泰明さん、槻橋修さん、小川次郎さん、そして西田さんとつながって来たバトンのようだ。コミュニティと向き合って何をつくるのかを考えるリレーといえるだろうか。一方で、隣のレーンでは、木ノ下智恵子さんから、芹沢高志さん、雨森信さん、藤浩志さん、永田宏和さん、そして曾我部昌史さんへとバトンが繋がれている。アートなどを通してまちに関わる態度を問うリレーとでもいえるだろうか。2人の走者が交わるともなく関係し合いながら並走している状況は、実際のまちづくりの現場の魅力を表すようで面白い。

このようなコラボレーションの広がりをまちづくりの「ヨコ」のリレーだとすれば、まちにはもうひとつ「タテ」のリレーというもの

2013年の瀬戸内国際芸術祭に参加している。伊吹島というイリコ漁で有名な島が、私たち(みかんぐみ+岡昇平+神奈川大学曾我部研究室)の活動の舞台。島を訪れてみると、きちんとした風景が心地良い。急な坂道は平たい割石の組積で整えられ、贅沢な瓦屋根が美しく折り重なる。歴史的に漁業で潤ってきたのだが、散策で触れる景観からも豊かな暮らしぶりが見てとれる。散策を続けると、雨樋の工夫が縦横無尽に伸びる様子や、不思議な形の木板外壁などが気になりはじめた。島の人に尋ねると、少しでも多くの雨水を集めるための雨樋の工夫であり、役目を終えた木船の板を再利用した外壁であるという。豊かな暮らしを支える生業に恵まれていながら、自然の恵みには丁寧に向き合おうという気質が、風景に描き出されているのだ。

そこで、島の未来を探求するための機関「伊吹しまづくりラボ」を立ち上げることにした。島民が研究員を務めるまちづくり拠点。芸術祭後も続けるつもりである。まず、これ

が存在するのではないだろうか。僕たちがいま生きているまちの魅力は、先人がつくった蓄積の上に成り立っているものであるし、さらに未だ見ぬ次世代のために引き継いでいくべきものでもある。持続可能なまちづくりのためには、同時代的な分野を超えた連携のバトンだけでなく、まちの歴史的な文脈を受け継ぎ積み重ねていく継承のバトンも大切だ。

この春、十数年ぶりに戻って来た研究室は、自分が学生だった頃と少しも変わらず、なんだか古くさく感じられた。しかし半年が過ぎたいま、この古さにも価値があるのではないかと感じはじめています。先生から学生へ、先輩から後輩へと思考の連鎖を重ねていくことで、まちに関わるひとつの規範をつくり出していくことが、大学の研究室が持つ大切な役割なのかもしれない。社会に対するフラットで自由なつながりが求められる時代にこそ、まわりに流されずに変わらないものを伝え続ける頑固なリレーというものもあっていい。

までに島が培ってきた価値を把握し理解するため、島の個性を整理しはじめた。建築の部位、祭礼や風習、漁法、民話など、島独特の豊かさがその背景と共に浮かび上がる。それらの豊かさを生かした島の将来を構想しようというわけである。個人的な豊かさを維持するためには、外から余計なものを持ち込まないようにしたい。また、今ある価値の理解が深まれば、個性的な豊かさをないがしろにするようなものを持ち込んだりはしないだろう。

拠点施設をつくるにあたり、数年前の台風被害で廃業し半ば廃墟化したイリコ工場の建物を借り受け、そこに遺棄されていた種々の素材を再構成して必要な設えをつくった。遺棄された漁具、古い建材、イリコ加工用具、段ボールなどが、階段や机や額縁などに変身しながら、個性的なラボが完成した。あるものだけでつくる。新しいものは持ち込まない。建物の設え方からまちづくりにまで通じる、この先のパラダイムではないだろうか。

オープン北加賀屋 地域の出来事をひらく、伝える

北加賀屋みんなのうえんのいま

ともに学び、ともに育てる農園づくり



第2農園、開墾中！
Date 2013.4.14- Venue みんなのうえん

現在、2つめの農園オープンに向けて、170坪の空き地を開墾中である。もともと銭湯があったというこの土地は、タイルやガラスなどの危険な破片や、大きなコンクリートの塊が土に混ざってしまっていた。これを取り除かなければ、農園をはじめることができない。そこで、普通は経験することのない「都会の土地を拓く」というプロセスを、多くの人と共有することにした。集まった十数名で、これからの農園の姿を頭に浮かべながら、土地の開墾に汗を流した。地道な作業だったが、8月にオープンする新しい農園で起こるさまざまな出来事を、どんな人たちと展開していけるのか、その期待に胸がふくらんだ。これから一緒になって農園の未来をつくりたい方は、みんなのうえん Web をぜひご覧いただきたい。

金田康孝(NPO法人Co.to.hana) デザインで社会の課題を解決するNPOに所属。アートの創造性と農を通して、世代を超えたつながりを生み出し、潤いのあるまちづくりを行っている。

堀田裕介のとれたてごはん

彩りトマトとナスのピネガーツテ



Illustration: Shingei Kokaji

新鮮なナスを手に入れたら一口サイズにカットして塩水に浸けておく。エリンギもカットして、トマトはヘタをとって洗う。フライパンにオリーブ油とニンニクを入れ、香りが立つまで温める。次にエリンギとよく水を切ったナスを入れ、最後にトマトを入れたらバルサミコ酢、醤油、白ワインを各大さじ1/2ずつ回し入れ、サツと炒めたら完成です！

堀田裕介：1977年、大阪府生まれ。「食べることは生きること、生きることは暮らすこと」をコンセプトに、ケータリング、商品開発、料理教室、ワークショップなどを企画。



コーポ北加賀屋のいま

多分野で活躍する協働スタジオの動き



七尾旅人とユザーンの西日本散歩～大阪お詫び編～
Date 2013.7.14 Venue コーポ北加賀屋

真夏の夜に最高のクリスマスソングが鳴り響く。体調不良から声が出なくなってしまった昨年末の公演のお詫びとして開催された本公演。U-zhaanがサンタ帽を被って出てくると、北加賀屋に少し遅いクリスマスがやって来た。電圧の関係で七尾のギターに予期せぬノイズが乗ってしまったのだが、ノイズと会場にいた少女を使って会場を和ませた。演奏中に客席から無邪気な幼児の声が聴こえてきたのだが、なぜかまったく苦にならず、不思議と楽曲と相まって心地良い。曲間に会場が静寂に包まれた際、七尾はこう言った。「何も音が鳴っていないのってすごく良いよね」。ハツとした。彼は沈黙やノイズ、子どもの声、誰かの咳、それらをひとつの音として許容し、「音楽」を奏でようとしているのだ。

森下孝(us/it) この夏から東京に拠点を移しました。企画・運営・編集・キュレーション・デザインなどいろんなことやってます。

北加賀屋オルタナティブスポット



北加賀屋のセントラルパーク

北加賀屋公園は子ども、お年寄り、スポーツを楽しむ少年や大人の憩いの場となっている。特に魅力的な場所は藤棚の下のお年寄りが集まる場所である。公園のベンチとは別に、どこからか持ち込まれた椅子が並んで憩いの場がつけられている。公園はこういう感じで使わないと。

家成俊勝：1974年、兵庫県生まれ。建築家。関西大学法学部法律学科卒業後、大阪工業技術専門学校夜間部を経てdot architectsを赤代武志と共同で主宰。

TOPICS from CFCO

おおさか創造千島財団 (CFCO) は、大阪で行われる芸術・文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

NEWS

10月は「北加賀屋ワンダーガヤガヤ」- 日常に、クリエイティブな驚きを -

北加賀屋に集積するさまざまな創造活動の交流の場をつくり、情報発信を行うなど、地域の多様なネットワーク形成を試みる「北加賀屋ワンダーガヤガヤ」。多様な人々が行き交い、驚きや発見、出会いや出来事が巻き起こる、活気に満ちたまちづくりに貢献したいと考えます。10月は以下の催しのほか、北加賀屋全域で同時多発的にイベントが開催されます。この機会に、ぜひ北加賀屋の秋をお楽しみください。

○ dracom 祭典 2013 方々ノ態 (in Osaka, Kitakagaya)

日程：2013年10月10日(木) - 14日(月・祝) 会場：クリエイティブセンター大阪 埠頭

主催：dracom URL：<http://dracom-pag.org>

○ 大橋可也 & ダンサーズ + 空間現代 大阪公演

日程：2013年10月12日(土) - 13日(日) 会場：クリエイティブセンター大阪 4Fドラフティングルーム

主催：大橋可也 & ダンサーズ URL：<http://dancehardcore.com/>

○ 北加賀屋みんなのうえん祭 2013

日程：2013年10月19日(土) 会場：クリエイティブセンター大阪、北加賀屋みんなのうえん①・②

主催：北加賀屋みんなのうえん運営事務局 URL：<http://minnanouen.jp>

○ みなとの物語 - 咲くやこの花賞受賞者、フランス新鋭作家展 -

日程：2013年10月18日(金) - 20日(日) 会場：クリエイティブセンター大阪

参加作家：後藤靖香、パラモデル、三宅砂織、淀川テクニク、Lola REBOUD、Enrique RAMIREZ

主催：千島土地株、おおさか創造千島財団

協力：TEZUKAYAMA GALLERY、アンスティチュ・フランセ関西、ART OSAKA 実行委員会

○ すみのえアートフェスタ 2013

日程：2013年10月20日(日) 会場：クリエイティブセンター大阪

主催：すみのえアートフェスタ 2013 実行委員会

○ 種から育てる子ども料理教室

日程：2013年9月15日(日)・29日(日)、10月19日(土)・27日(日)

※以降、12月までの毎月2回の教室開催日はWeb、メールにてお知らせ ※要申込

主催：NPO法人 Co.to.hana、種から育てる子ども料理教室 URL：<http://minnanouen.jp>

※10月イベントカレンダーは、当財団Web (chishimatochi.info/found)よりダウンロードいただけます。

ACTIVITY

2012年度 創造活動助成

生西康典「おかえりなさい、うた Dusty Voices, Sound of Stars 5.1ch ver.」

文・杉本善則 (HOP KEN)

2010年の恵比寿映像祭に出展した同氏の作品に、5.1サラウンドのミックスを施し、映像のない音だけの作品として上映した。真っ暗闇の中、気配そのものを感じるような生々しい音響で“うた”というおぼろげなテーマを紡いだ「聴く映画」。会期中には、生西氏、九龍ジョー氏、細馬宏通氏によるトーク(写真)や、テニスコート、山本精一氏が作品にライブで演奏を加える試みも。



photo: Mai Naitoa



photo: GO

大橋可也&ダンサーズ+空間現代《Whispers》



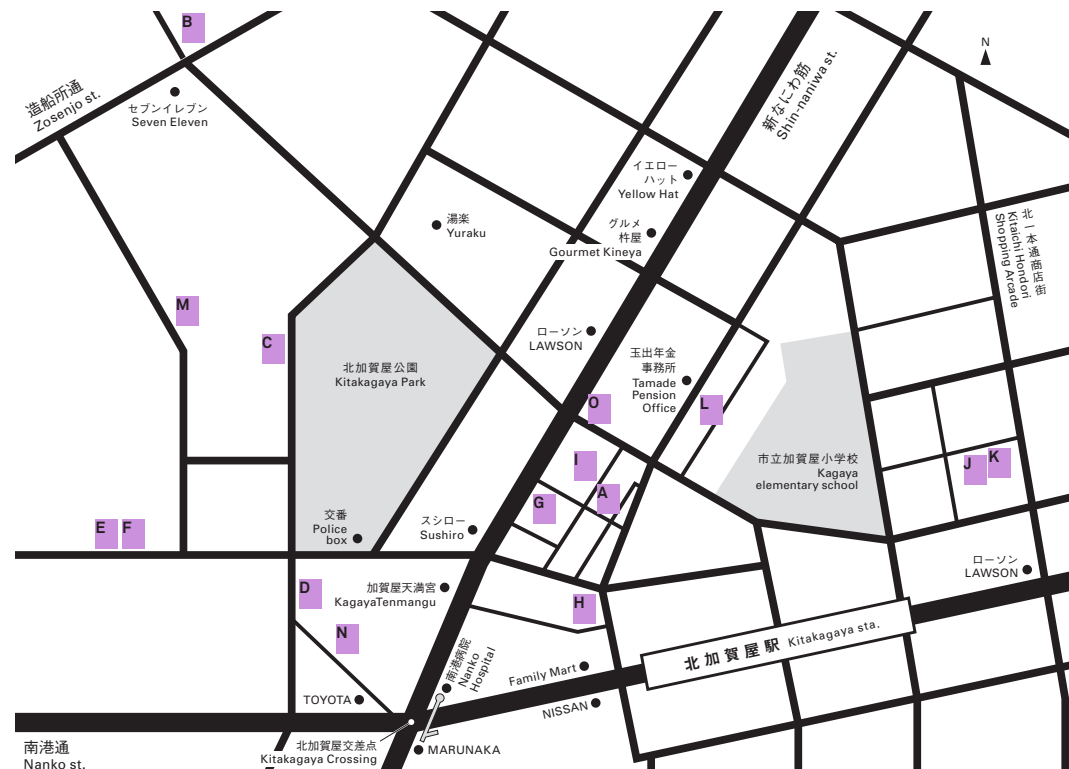
みんなのうえん「スムージーワークショップ(すみのえアートフェスタ 2012)」



Lola REBOUD (Rhinocéros)

MAP

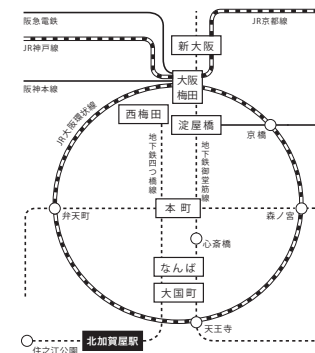
おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信/ネットワーキングの支援を行っています。



2013年9月9日現在

- [A] ク・ビレ邸 / インフォメーションセンター [北加賀屋 2-8-8] URL: quillezthe.wordpress.com
- [B] クリエイティブセンター大阪 (CCO) / 複合アートスペース [北加賀屋 4-1-55 名村造船所旧大阪工場跡地] URL: www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋 / 協働スタジオ [北加賀屋 5-4-12] URL: www.coop-kitakagaya.blogspot.jp/
- [D] おしま絵画教室 / アトリエ [北加賀屋 5-2-31] URL: www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 藝術中心◎カナリヤ条約 / アートスタジオ [北加賀屋 5-5-35] URL: canaryconvention.wordpress.com/
- [F] 鞆鞆館 / シェアハウス [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [G] AIR 大阪 (アーティスト・イン・レジデンス大阪) / 宿泊施設 [北加賀屋 2-9-19] URL: airosaka.com/
- [H] Co.to.hana (コトハナ) / アトリエ&オフィス [北加賀屋 2-10-21] URL: www.cotohana.jp/
- [I] 隠れ屋 1632 秘密基地 / 手づくりメガネ&アクセサリー [北加賀屋 2-8-9] URL: www.kakureya1632.com/
- [J] CAFÉ DJANGO / 自家焙煎コーヒー店 [北加賀屋 1-6-28 カガ第2ビル1F] URL: www.django.jp/
- [K] 騒ギニ乗ジテ / ギャラリー・バー [北加賀屋 1-6-1 カガ第1ビル1F] URL: sawaginijoujite.jimdo.com/
- [L] 北加賀屋みんなのうえん(クリエイティブファーム)① / コミュニティファーム [北加賀屋 2-4-6] URL: <http://minnanouen.jp/>
- [M] メガアート倉庫(仮) / オープン・ストレージ [北加賀屋 5-4-48]
- [N] 北加賀屋みんなのうえん(クリエイティブファーム)② / コミュニティファーム [北加賀屋 5-2-27] URL: <http://minnanouen.jp/>
- [O] b(フラット) Gallery / カフェ・ギャラリー [北加賀屋 2-3-17] URL: flat9gallery.wix.com/flatgallery

※ご見学希望の場合は、事前にWebなどで情報を確認いただくか、各施設にお問い合わせください。



主要駅から北加賀屋までのアクセス

○ 地下鉄「梅田」駅から
地下鉄御堂筋線で「大国町」駅まで約10分、
地下鉄四つ橋線に乗り換えて約8分

○ 地下鉄「西梅田」駅から
地下鉄四つ橋線で約17分

○ 「関西空港」駅から
南海空港線で「粉浜」駅まで約53分、
徒歩で約20分



北加賀屋 犬ものがたり



makomo

makomo

イラストレーター、絵本づくり。ちょっとだけおもしろい絵と文とで雑誌、書籍、Webなどで活躍中。また個展と称して、くだらないものを大きく描いただけの作品を発表している。

北加賀屋周辺を見て歩いて、必死こいてできあがったのが上のマンガです。自分ではおもしろいと思っていますが、どうでしょう？ 寛大な心で見てやってください。(makomo)

paper C No.006

by Creative Foundation for Creative Osaka

「paper C」は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が主に拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

発行日：2013年9月9日

発行元：一般財団法人 おおさか創造千島財団 事務局

〒559-0011 大阪市住之江区北加賀屋2丁目11番8号千島ビル4階

TEL 06-6681-7806 FAX 06-6681-6188

URL www.chishimatochi.info/found/

編集ディレクション & 編集：多田智美 [MUESUM] 編集：永江大 [MUESUM]

アートディレクション：原田祐馬 [UMA/design farm] デザイン：廣田碧 [UMA/design farm]